

フィンランド国立アテネウム美術館とは



アテネウム美術館外観 Photo Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen

フィンランド国立アテネウム美術館は、ヘルシンキ現代美術館(キアズマ)やヨーロッパのオールド・マスターを集めたシネブリュコフ美術館とともにフィンランドを代表する美術館の一つです。

コレクションは、1750年代から1960年代以降のフィンランド作家を中心に扱っています。なかでも、フーゴ・シンベリの《傷ついた天使》やヘレン・シャルフベックの《快復期》のような国民的作品が有名ですが、ゴッホの《オーヴェル・シュル・オワーズの通り》やポール・セザンヌの《エスタックの道路橋》などのフランス近代美術も所蔵しています。美術館は、建築家テオドル・ホイエルにより設計され1887年に完成しました。国定文化遺産建築としてヘルシンキ市の中心部に位置しています。

⇒フィンランド国立アテネウム美術館:ateneum.fi

⇒フィンランド国立美術館:kansallisgalleria.fi

会期・会場

(一部予定を含む)

東京展

2015年
6月2日(火)～7月26日(日)
東京藝術大学大学美術館

主催:東京藝術大学、NHK、NHKプロモーション、日本経済新聞社
後援:フィンランド大使館、フィンランドセンター
特別協力:フィンランド国立アテネウム美術館
協賛:損保ジャパン日本興亜、大日本印刷

東京藝術大学大学美術館 <http://www.geidai.ac.jp/museum/>

アクセス

JR上野駅(公園口)、東京メトロ千代田線根津駅(1番出口)より徒歩10分

京成上野駅(正面口)、東京メトロ日比谷線・銀座線上野駅(7番出口)より徒歩15分

※駐車場はございませんので、お車のご来館はご遠慮ください。



仙台展

2015年
8月6日(木)～10月12日(月・祝)
宮城県美術館

主催:宮城県美術館、NHK仙台放送局、NHKプラネット東北、日本経済新聞社

後援:フィンランド大使館、フィンランドセンター
特別協力:フィンランド国立アテネウム美術館
協賛:損保ジャパン日本興亜、大日本印刷

宮城県美術館 <http://www.pref.miyagi.jp/site/mmoa/>

アクセス

1)バス利用の場合

- ①仙台駅前西口バスプール仙台市営バス16番乗場から交通公園循環(広瀬通経由)もしくは川内営業所行に乗車、二高・宮城県美術館前下車
- ②広瀬通一番町バス停からも上記バスをご利用いただけます。

2)タクシー利用の場合

- 仙台駅から約10分
- 3)るーぶる仙台バスの場合
- 二高・宮城県美術館前下車



広島展

2015年 2016年
10月30日(金)～1月3日(日)
奥田元宋・小由女美術館

主催:奥田元宋・小由女美術館、NHK広島放送局、NHKプラネット中国、中国新聞社、日本経済新聞社

後援:フィンランド大使館、フィンランドセンター
特別協力:フィンランド国立アテネウム美術館
協賛:損保ジャパン日本興亜、大日本印刷

奥田元宋・小由女美術館 <http://www.genso-sayume.jp>

アクセス

- 中国自動車道「三次IC」から2.5km。車で約3分。
- 中国横断自動車道尾道松江線「三次東IC」から9km。車で約15分。
- 「JR広島駅」～「JR三次駅」列車:1時間40～50分(快速1時間20分程度)
- 「広島バスセンター」～「三次バスセンター」バス:1時間20～30分
- 「JR三次駅」～「三次バスセンター」から5km。バスで約15分、[美術館前]下車。タクシーで約10分。



葉山展

2016年
1月10日(日)～3月27日(日)
神奈川県立近代美術館 葉山

主催:神奈川県立近代美術館、NHK横浜放送局、NHKプロモーション、日本経済新聞社

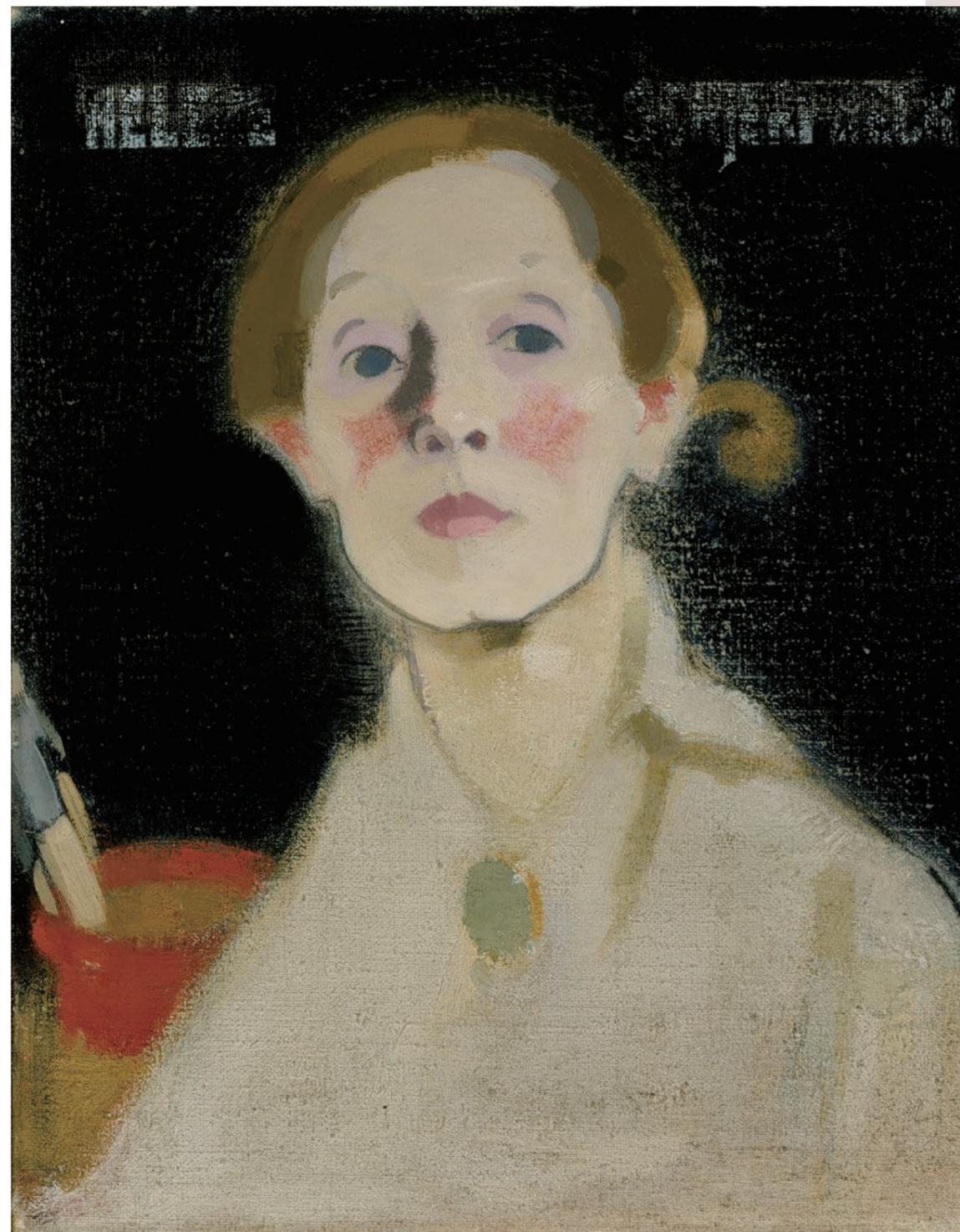
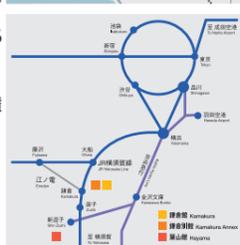
後援:フィンランド大使館、フィンランドセンター
特別協力:フィンランド国立アテネウム美術館
協賛:損保ジャパン日本興亜、大日本印刷

神奈川県立近代美術館 葉山

<http://www.moma.pref.kanagawa.jp>

アクセス

- 電車・バス
JR横須賀線「逗子」駅前(3番のりば)、または京浜急行「新逗子」駅前(南口2番のりば)から京浜急行バス「逗11、12系統(海岸回り)」で「三ヶ丘・神奈川県立近代美術館前」下車(所要時間約15分)。
- 車
横浜横須賀道路逗子インターチェンジ、または横浜須賀インターチェンジからそれぞれ7～8km。



《黒い背景の自画像》1915年 油彩・カンヴァス フィンランド国立アテネウム美術館蔵
Herman and Elisabeth Hallonblad Collection, Ateneum Art Museum, Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen

ヘレン・シャルフベック
——魂のまなざし

フィンランドを生きた女性画家の軌跡

helene-fin.exhn.jp

Helene Schjerfbeck
Reflections

報道用資料

プレス問い合わせ 『ヘレン・シャルフベック——魂のまなざし』広報事務局(ユース・プランニングセンター内)

〒150-8551 東京都渋谷区渋谷1-3-9-3F TEL:03-6826-8853 FAX:03-3499-0958 メールアドレス:helene-fin@ypcpr.com

<http://helene-fin.exhn.jp/>

開催概要

この度、フィンランドを代表する画家ヘレン・シャルフベック(1862-1946)の個展を日本で初めて大規模に開催します。シャルフベックは、2012年に生誕150周年を記念する大回顧展がフィンランド国立アテネウム美術館で開催され、近年、世界的に注目される画家の一人となっています。

彼女は、3歳のときに事故で左足が不自由になりましたが、11歳で絵の才能を見いだされ、後に奨学金を獲得し憧れのパリに渡ります。パリでは、マネやセザンヌ、ホイッスラーといった画家たちから強い影響を受けました。フィンランドに帰国後は母親の介護をしながらヘルシンキ近郊の街で絵画制作を続け、自分のスタイルを展開しました。これ以降のシャルフベックの作品からは、17世紀のエル・グレコに学んだ作品など、美術雑誌からインスピレーションを得ようとしていたことがわかります。また、彼女は新しい技法を試すかのように、斬新なスタイルの自画像を多数制作しました。

本展では、5つのセクションでシャルフベックの全貌に迫ります。19世紀末から20世紀初めに活躍したフィンランド女性画家の魂の軌跡を日本で初めてご覧いただけます。



《快復期》 1888年 油彩・カンヴァス
フィンランド国立アテネウム美術館蔵
Ateneum Art Museum,
Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen



《木こり》 1910-1911年
油彩・クレヨン・カンヴァス
フィンランド国立アテネウム美術館蔵
Ateneum Art Museum,
Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen



《扉》 1884年 油彩・カンヴァス
フィンランド国立アテネウム美術館蔵
Ateneum Art Museum,
Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen

みどころ

◆フィンランド好きなら知っておきたいフィンランドの国民的画家による初の回顧展

2017年に建国100年を迎えるフィンランド——日本に最も近いヨーロッパ諸国の一つであることに加え、フィンランドを舞台にした映画やフィンランドデザインが注目されていることもあり、近年多くの日本人がフィンランドを訪れファンも増えています。フィンランドファンなら是非とも知っておきたい国民的画家がヘレン・シャルフベックです。シャルフベックの作品を通じて、これまで気づかなかったフィンランドの一面が見えてくるでしょう。

◆時代とともに変遷——画家人生を全うしたシャルフベックの生き方を感じる

シャルフベックの作品は、可愛らしい子供や明るい色調で描かれた作品が多くみられますが、それだけを取り上げて彼女の絵を評価することは正しくありません。彼女がパリで吸収したものを大胆に抽象化した作品に、アヴァンギャルドな精神を見ることができるでしょう。マネやセザンヌ、ホイッスラーの影響を受けつつ、シャルフベックが独自に切り開いていった世界を肌で感じてください。また、晩年に鏡の中の自分を残酷なまで冷徹に見つめた自画像も見どころです。女性でありながら美化することを一切拒否した、まるで骸骨のような自画像からは、性別にこだわることなく、死ぬまで一人の画家であり続けようとした強い「まなざし」を感じるはずです。

◆シャルフベックの代表作が一堂に

本展では、フィンランドの国宝級の作品といわれる《快復期》(1888年)、《黒い背景の自画像》(1915年)をはじめ、ホイッスラーの影響を強く感じさせる《お針子(働く女性)》(1905年)、セザンヌの影響がある《赤いリンゴ》(1915年)、ファッション誌から出てきたような《島から来た女性》(1929年)、リアリステックな描写が際立つ《少女の頭部》(1886年)、愛らしい《母と子》(1886年)など、初期から晩年に至る画業を網羅しました。フィンランド国立アテネウム美術館のコレクションを中心に代表作を一堂に会します。

ヘレン・シャルフベック 略年譜

1862年7月10日

ヘルシンキに生まれる。3歳の時の事故が生涯にわたる足の不自由をもたらす。

1877~79年

ヘルシンキにあるアドルフ・フォン・ベッカーの私立学校で学ぶ。1879年、初めてフィンランド芸術協会の例年の展覧会に参加する。

1880年

歴史画《雪の中の負傷兵》がフィンランド芸術協会のコレクションとなる。奨学金を得てパリへ渡り、私立アカデミー・トレラとアカデミー・コロロッシで学ぶ。

1883年

初めてパリのサロンに参加する。

1883~94年

フィンランド芸術協会の依頼を受け、ウィーン、 Санкт・ペテルブルク、フィレンツェを旅し古典絵画を模写した。この時期、コーンウォール地方のセント・アイヴズやブルターニュ地方のボン＝タヴァンに数度にわたり長期滞在している。

1898~1902年

フィンランド芸術協会の素描学校で静物・人物クラスを教える。

1902年

母親とともにヘルシンキ郊外の町ヒュヴィンカーに引っ越す。

1903~1912年

『L'Art et les Artistes』や『L'Amour de l'Art』といった国際的な美術雑誌を定期購読。トゥルク美術協会の展覧会にしばしば出品する。

1913年

画商のヨスタ・ステンマンがシャルフベックからいくつかの作品を直接購入。彼は生涯にわたる支援者となる。

1915年

森林保護官で画家のエイナー・ロイターがシャルフベックを訪問。二人の友情と文通が始まり、シャルフベックが亡くなるまで続いた。ロイターは1917年にシャルフベックの最初の伝記を執筆、出版する。

1917年

兄マグヌス・シャルフベックとエイナー・ロイターの協力、ヨスタ・ステンマンの主催により、159作品を集めた初の個展がヘルシンキのステンマンのサロンで開催される。

1925年

南フィンランド沿岸のリゾート地タミサーリに引っ越す。

1927年

ステンマンは、初期作品のうち人気の高い《お針子(働く女性)》や《快復期》、《ヴィルヘルム・フォン・シュヴェーリンの死》などの「再解釈」作品を制作するようシャルフベックに勧める。

1937年

ステンマンはストックホルムでシャルフベックの個展を開催し、大きな評判となる。その後もストックホルムだけでなく、スウェーデンの様々な町で、ほぼ毎年、彼女の個展を開催した。

1946年1月23日

ストックホルム近郊ザルツヨパーデンの療養ホテルの一室で83歳で亡くなる。



ヘレン・シャルフベック、1890年頃
Finnish National Gallery

展覧会の構成

展覧会では、5つの章に分けた作品群を通して彼女の画業を辿ります。

第1章

初期:ヘルシンキーパリ

3歳で左腰に障害を負ったシャルフベックは、学校に通うことができず家庭教師から教育を受けます。家庭教師から素描の才能を認められると、彼女は11歳のときフィンランド芸術協会で素描を学ぶことが許され、15歳になると、パリで学んだ画家アドルフ・フォン・ベッカーのアトリエで絵画を学び始めます。すぐに才能を発揮した彼女は《雪の中の負傷兵》(1880年)によってパリ行きの奨学金を手に入れました。シャルフベックはデビューから画家としての将来が約束されていたのです。

1880年にパリに渡ったシャルフベックは、アカデミー・コラロッシで多くの女子留学生とともに学び、当時流行の“リアリズム”のスタイルを身につけます。学友たちとブルターニュ地方のポン=タヴァンに旅し、土地の子供たちを優しいまなざしで描いた《妹に食事を与える少年》(1881年)は、フランス留学の最初の成果と言えるでしょう。また、イギリスのセント・アイヴズにも二度滞在し、そこでは自然主義的な光の表現を手に入れました。ここで描かれた《快復期》(1888年)は、1889年のパリ万博で銅メダルを獲得し、現在は国立アテネウム美術館を代表する記念碑的な作品として知られています。



《少女の頭部》 1886年 油彩・板
フィンランド国立アテネウム美術館蔵
Ahlström Collection, Ateneum Art Museum,
Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen



《赤いリンゴ》 1915年 油彩・カンヴァス
フィンランド国立アテネウム美術館蔵
Yrjö and Nanny Kaunisto Collection, Ateneum Art Museum,
Finnish National Gallery/Henri Tuomi



《お針子(働く女性)》 1905年 油彩・カンヴァス
フィンランド国立アテネウム美術館蔵
Ateneum Art Museum, Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen

第2章

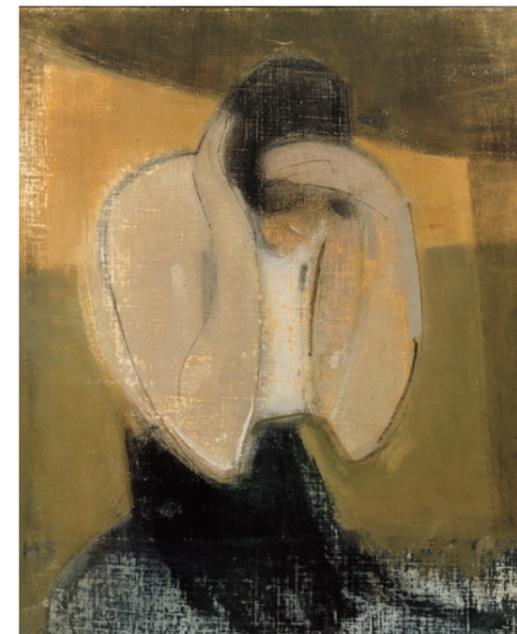
フランス美術の影響と消化

パリからヘルシンキーに戻ったシャルフベックは、母親の介護を兼ねてヘルシンキーから50キロほど北に離れたヒュヴィンカーの小さなアパートに移り住みます。ヘルシンキーのアートシーンから離れたため、シャルフベックは最新の情報をフランスの美術雑誌を定期購読して得るようになりました。この時期彼女は雑誌を通じて、レアリスムの時代が過ぎ去ったことを感じていたのかもしれませんが。この小さな城に籠もることでパリでの美術体験が熟成し、そして一気に花開きます。彼女の作品は抽象化が進み、マネやホイッスラー、セザンヌなどの色濃い影響が見え始めました。なかでも、ヨーロッパ中の話題をさらったホイッスラーの作品は、彼女にとっては鮮烈なものだったでしょう。ホイッスラーによる《画家の母》(1871年)の影響をシャルフベックの《お針子(働く女性)》(1905年)にはっきりと見て取ることができます。

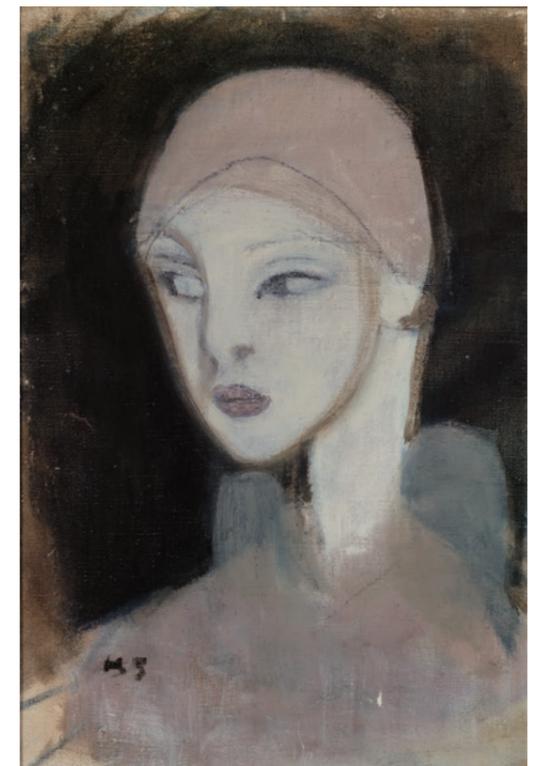
第3章

肖像画と自画像

シャルフベックは画家としての自分の姿を自画像として表すとともに、自分の好きな人々の肖像画を多く描きました。どの肖像画も抽象的かつ明るい色調で、まるでモード雑誌を見るような当世風のスタイルは、シャルフベックのパリ体験や購読していた雑誌の影響によるものでしょう。女性の肖像画が多いなかで、シャルフベックの画家仲間エイナー・ロイターの肖像《船乗り》(1919年)は、ひととき異彩を放っています。19歳年下の彼は、シャルフベックの作品を高く評価する良き理解者で、彼女の伝記を初めて執筆しました。彼女はロイターに対する想いが、叶わぬ恋だと気付きながら、彼が別の女性と婚約すると、絶望に打ちひしがれ《ジプシー女》(1919年)にその心情を託します。この失恋から立ち直るためにシャルフベックは、二ヶ月の通院を余儀なくされたほどでした。ロイターに手紙で心の苦しみを訴えながら、自分の顔を傷つけた《未完成の自画像》(1921年)も残っています。



《ジプシー女》 1919年 油彩・カンヴァス
フィンランド国立アテネウム美術館蔵
Yrjö and Nanny Kaunisto Collection, Ateneum Art Museum,
Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen



《島から来た女性》 1929年 油彩・カンヴァス
フィンランド国立アテネウム美術館蔵
Yrjö and Nanny Kaunisto Collection, Ateneum Art Museum,
Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen

第4章

自作の再解釈とエル・グレコの発見

母親が亡くなった後、シャルフベックはリゾート地タンミサーリに居を移します。歳を重ね、体調も思わしくない中で、制作だけが彼女の生きがいとなります。静かな環境のなか、ここでも彼女は雑誌や画集からインスピレーションを求めました。例えば、セザンヌやピカソによって再評価されていたエル・グレコに、シャルフベックも注目するようになります。彼女はエル・グレコの作品を実際に見たことはありませんでしたが、本の挿図から想像をふくらませることができたのです。《エル・グレコの天使断片》(1928年)で表現された色彩は、彼女の現代的な感性によるものです。また、画商ステンマンの提案により、若い頃の自作に基づく制作を始めることとしました。それは、単に人気のあった作品のレプリカではありません。《お針子の半身像(働く女性)》(1927年)や《パン屋II》(1941年)で見られるように、自作を抽象的に再解釈する新しい試みだったのです。



《エル・グレコの天使断片》 1928年 テンペラ・油彩・カンヴァス
フィンランド国立アテネウム美術館蔵
Ester and Jalo Sihtola Fine Arts Foundation Donation, Ateneum Art Museum,
Finnish National Gallery/Janne Mäkinen



《お針子の半身像(働く女性)》 1927年 油彩・カンヴァス
フィンランド国立アテネウム美術館蔵
Yrjö and Nanny Kaunisto Collection, Ateneum Art Museum,
Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen

第5章

死に向かって:自画像と静物画

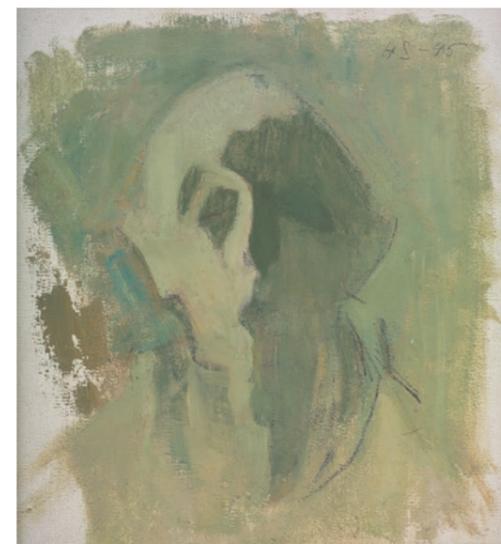
シャルフベックは画家としての自分を記録するだけでなく、鏡の中の自分を残酷なまでに見つめることがありました。自画像に傷をつけたり、顔のバランスを欠くような表現も見られます。1944年になるとシャルフベックは、ステンマンの勧めでスウェーデン、ザルツヨパーデンの療養ホテルに移り住みます。死期を感じながら、ホテルの一室で制作に打ち込む彼女のために、ステンマンは彼女が必要な画材や資料を提供しました。彼女はここで日に日に近づいてくる死を感じながら、骸骨のような自分の顔を冷徹に見続けていました。《黒い林檎のある静物》(1944年)には、衰えていく自分と重ね合わせた、腐りゆく林檎が描かれています。ホテルの一室で最後の瞬間まで自分に向けたまなざしは、20点以上の自画像を生み出しました。そして1946年に彼女はその生涯を閉じるのです。



《黒いリンゴのある静物》 1944年 油彩・カンヴァス
ディドリクセン美術館蔵
Didrichsen Art Museum, Helsinki Photo©Rauno Träskelin



《正面を向いた自画像I》 1945年 油彩・カンヴァス
フィンランド国立アテネウム美術館蔵
Yrjö and Nanny Kaunisto Collection, Ateneum Art Museum,
Finnish National Gallery/Hannu Aaltonen



《自画像、光と影》 1945年 油彩・カンヴァス
ユレンベリ美術館蔵
Signe and Ane Gyllenberg Foundation, Helsinki
Photo©Matias Uusikyla